

あの時、山田和樹は「読売日本交響楽団は永久に不滅です！」と叫んだ

池田卓夫



2023年1月19日《第624回定期演奏会》 ©読響 撮影=堀田カヲ

出会いは「サマーフェスティバル《三大交響曲》」

読売日本交響楽団の首席客演指揮者を2018年4月から務めてきた山田和樹(1979年1月26日生まれ)が24年3月末で退任する。39歳から45歳まで、日本の内外で活躍を広げた充実期に当たっていた。降ってわいた新型コロナウイルス感染症のパンデミック(世界拡大)、さらにウクライナや中東の混乱で日本とヨーロッパの往復が一気に困難となる中でも様々な障壁を乗り越え、読響との共演を重ねてきた。

山田との初共演は11年8月16日。サントリーホールでの「サマーフェスティバル《三大交響曲》」。シューベルトの第7番〈未完成〉、ベートーヴェンの第5番〈運命〉、ドヴォルザークの第9番〈新世界から〉を指揮した。仏ブザンソン国際指揮者コンクールで第1位を得た2年後で、前年に同コンクール優勝の先輩、小澤征爾が総監督を務めるサイトウ・キネン・フェスティバル松本(現セイジ・オザワ松本フェスティバル)へデビューしたばかりの32歳。読響でもまずは毎年恒例、全く同じ曲目で指揮者の力を測る《三大交響曲》の試金石に招き、山田の可能性を探ったのだろう。

山田といえば、武満徹以前の日本人作曲家やドイツ語圏以外のレアな作品の紹介に定評がある。ところが読響では首席客演指揮者就任までしばらくの間、ベートーヴェンやR.シュトラウス、チャイコフスキーなどの定番を《名曲》や《土日マチネー》で手際よく振る気鋭のマエストロに徹し、《定期》は指揮していない。17年11月の日生劇場、18年1月の静岡市民文化会館ではドヴォルザークの歌劇〈ルサルカ〉のピットをともにしているが、読響主催ではなくNISSAY OPERAの枠組みだった。

最初の定期登場で豹変、マーラー〈花の章〉に最高の音を刻む

18年4月の首席客演指揮者就任後も40歳を迎える19年1月まで演奏会はなかった。だが《名曲》と《土日マチネー》の3公演に続く1月18日のサントリーホール、山田初の《定期》(第584回)で様相が激変する。諸井三郎〈交響的断章〉(1928)と、藤倉大の共同委嘱新作のピアノ協奏曲第3番〈インパルス〉(2018)日本初演で始め、ワーグナーの舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉〜第1幕への前奏曲、スクリャービン交響曲第4番〈法悦の詩〉の神秘と対比させた。6月13日の《定期》(第589回)も伊福部昭、グリエール、カリンニコフの音響を鮮やかに描き分け、山田ワールドが全開となった。

とりわけ20年2月前半(1~13日)には東京、大阪、福井、横浜で計6公演を集中的に指揮して、読響と山田の共同作業は新しい次元に到達した。東京の《土日マチネー》とツアーの4公演は同一プログラム。マーラーが当初、交響曲第1番〈巨人〉の1つの楽章として書き、後に分離した〈花の章〉と〈巨人〉の間にネマニャ・ラドゥロヴィチ独奏のハチャトゥリアンのヴァイオリン協奏曲があった。読響と同系列の球団のシーズン開幕を意識したわけでもないだろうが、この時期の「読売」で「巨人」を手がけること自体、山田の読響への強い思い入れのように感じられた。これを指揮する指揮者は間違いなくVIP(最重要人物)だ。私は某楽器メーカーが顧客サービスで企画したゲネプロ(本番前の総練習)見学の解説者も務め、リハーサルから本番までをつぶさに聴いたが、実に繊細で美しく、若々しい力に満ちた名演だった。マーラー2曲は20年2月1日と2日の東京芸術劇場での公演を編集したライブ盤が日本コロムビアから出ているので、改めてお聴きいただきたいと思う。

後に山田は〈花の章〉について、私の質問に答える形でこう語っている(『音楽の友』誌 22年5月号)

「あまりにも美しいから、シンフォニーから切り離したのだと思います。若い日の大切なもの、かけがえのないものを、そのままとっておきたい気持ちがありますよね？ マーラーは初演後に譜面に手を入れることで有名でしたが、〈花の章〉は素の持ち味のまま、残っています。決して、『演奏時間が長くなるから外した』のではないでしょう。歌曲ではないのに、オーケストラだけで完璧に歌の世界を表現した名曲だと思います」

週末の名曲プログラムの冒頭にあえてレア物の〈花の章〉を置き、後半メインの〈巨人〉と切り離して演奏する筋を通すのも山田らしい判断だった。残り2公演ではソリストにイーヴォ・ポゴレリッチが登場。シューマンのピアノ協奏曲では異様に耽美的な怪演で山田を振り回したが、どうやら気に入られたらしい。23年1月7日と8日の《土日マチネー》のラフマニノフのピアノ協奏曲第2番で再共演が実現した。20年2月に話を戻せば連続6公演の成功を受け、山田と読響はさらなる快進撃を続けるはずだった。しかし2月26日、安倍晋三首相（当時）はコロナ禍急拡大を受けて活動自粛を要請、ほとんど全部の演奏会が延期か中止を余儀なくされた。山田と読響の共演にも、13か月の空白が生まれてしまう。

手に手を携え、コロナ禍に立ち向かう

それだけに21年3月《定期》のウェーベルン、別宮貞雄、グラズノフ、《名曲》のリスト、R.シュトラウス、ニールセン、《土日マチネー》のコーブランド、ガーシュイン、ヴィラ=ロボス、レスピーギでは、すべてのテンションが猛烈に高かった。中でも3月9日、サントリーホール《名曲》(第640回)には、山田の強い意志を感じた。リストの交響詩〈前奏曲〉、R.シュトラウスの交響詩〈死と変容〉、ニールセンの交響曲第4番〈不滅〉の並びに「コロナ禍長期化で人々は死への前奏曲を絶えず聴いているが、いつか変容(変異株では断じてなく!)に至り、最後は不滅を確信する」というメッセージがこめられていた。最後、指揮台へ上った山田がマスク姿で客席に向



2021年3月14日《第235回日曜マチネーシリーズ》
©読響 撮影=青柳聡

かって叫んだ

「読売日本交響楽団は永久に《不滅》です！」

ある年齢以上の日本人には説明するまでもない。ミスター・ジャイアンツ、読売巨人軍の長嶋茂雄が現役引退した1974年10月14日、旧後樂園球場で涙ながらに語った惜別の辞「わが巨人軍は永久に不滅です」のパロディーだ。山田の「読売愛」は深まっていた。

2022年は再び先行き不透明感が強まり、3月の《定期》と《名曲》だけの登場だったが、両方にコルンゴルトを入れ、《名曲》のフリードリヒ・グルダのチェロ協奏曲(独奏=横坂源)と《定期》の諸井三郎の交響曲第3番の個性を際立たせるセンスの見事さは健在だった。

23年は先述したポゴレリッチとの再共演に始まり、黛敏郎〈曼荼羅交響曲〉とマーラーの交響曲第6番〈悲劇的〉の《名曲》と《川崎マチネー》、矢代秋雄〈交響曲〉とR.シュトラウス〈アルプス交響曲〉の《定期》で「日本と世界の名作」路線を前へ進めた。R.シュトラウスは富山、福井両市を回る北陸公演にも持ち込み、富山県出身の高校生ピアニスト中瀬智哉が独奏するラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を前半に置いた。〈アルプス交響曲〉は地方公演では異例の大曲だが、「立山黒部アルペンルートのお膝元で〈アルペン〉(アルプス交響曲)を演奏したい」と山田が熱望しただけあって、感動的な名演奏が生まれた。急激にスケール感と踏み込みの鋭さを増した山田の進境を、強く印象づけるツアーでもあった。

いよいよ「首席客演指揮者時代」の総決算へ

首席客演指揮者の立場では最後の共演となる24年2月。山田は東京芸術劇場の《土日マチネー》(第264回)でグラズノフ、ハイドン、カプースチン、ラヴェルを、サントリーホール《定期》(第635回)でバルトーク、武満徹、ベートーヴェンを、サントリーホール《名曲》(第670回)とフェスティバルホール《大阪定期》(第37回)でR.シュトラウス、ブルッフ、フランクを振る。作曲家名をよく、ながめてほしい。ドイツ・オーストリアの古典とロマン派、フランス近代音楽、ロシア&東欧音楽、日本人の作品と、初共演からこれまでのレパートリーの数々が万華鏡のようにちりばめられている。総決算の1か月が始まる。

池田卓夫(音楽ジャーナリスト) @いけたく本舗® <https://www.iketakuhonpo.com/>